

ご近所の お医者さん

 666

持田皮フ科院長 持田和伸さん 一泉大津市

暖房器具による低温やけど

寒い日が続き、暖房器具を使われていると思います。今回は、使用時に注意が必要な「低温やけど」のお話をします。

まず、「やけど」は熱により皮膚がダメージを受けた状態です。医学的には「熱傷」といい、ダメージの深さによりⅠ度からⅢ度に分けられます。深さが、

皮膚表面の角質層から下に約0.3mmの厚さの表皮までの「Ⅰ度熱傷」。その下、約0.7〜3mmの真皮までの「Ⅱ度熱傷」。さらにその下の、皮下組織

気付かずに重症化も

や骨まで達すると「Ⅲ度熱傷」です。Ⅰ度熱傷は、例えば日焼けで赤くなる状態です。放っておいても治りますが、ステロイド外用薬などで炎症が早く引きます。Ⅲ度熱傷の回復には手術が必要で、状況によっては、皮膚の処置よりも救命が優先されます。

その間のⅡ度熱傷は、熱々のフライパンやお湯に触れた場合など、日常生活で発生しやすいです。通常は水ぶくれができ、1〜2週間ほど薬を塗ると、傷痕が残らずに治ります。ただし、真皮の深部までダメージを負う「深部Ⅱ度熱傷」は、治療が長期化したり傷痕が残ったりします。

暖房機器による低温やけどは、深部Ⅱ度熱傷に該当します。心地よい暖か

さでも、時間をかけて皮膚の深部までダメージが浸透しています。当初は「少し赤い」「少しかゆい」だけですが、2週間ほどで皮膚が壊死し、黄色や黒色のカサブタ状になり、その皮膚を削る手術が必要になります。その面積が広いと、自身の健康な皮膚を熱傷の部分に植える「植皮」という手術をする場合もあります。

湯たんぽやカイロなどは、同じ箇所に長時間当てないよう工夫しましょう。また、体にまひのある方や、皮膚が薄い高齢者・乳幼児への使用にも注意が必要です。最近では、スマートフォンに内蔵されたバッテリーによる低温やけどの報告もあります。

熱傷を負った場合は、冷やし過ぎによる「しもやけ」に注意しながら、最低15分は冷やしましょう。熱傷の深さを最小限に留めることができます。そして、早めの皮膚科受診をお勧めします。

